エコジン・インタビュー
[ecojin_interview]

中嶋朋子

自分らしく、エコライフ

北海道で長い間過ごした経験から、エコに目覚めたという女優・中嶋朋子さん。現在は一児の母として、エコロジカルな生活を送っています。

写真／かくたみほ

エコジン vol.2
2007年9月号

アートディレクション＋デザイン
Tattaka、泉沢儒花（Bit Rabbit）

cover撮影
かくたみほ

環境にも、健康にもいい自転車通勤。
エコな乗り物で、快適な街の暮らしを楽しみませんか。

エコジン

9 月 号
［エコジン］
Vol.2 Sep. 2007

CONTENTS

03 エコジン・インタビュー
中嶋朋子「自分らしく、エコライフ」
06 特集
きもちのいい街。
16 海外エコ事情
18 特集2
経済をグリーンにする
22 エコ・ジャーナル
エコ百科［改正・動物愛護管理法］
24 エコジン・レポート［楽しく、環境教育。］
26 エコジン・アイ
32 エコ生活のもと
33 エッセイ 大江戸エコ口帖 第二回
34 「冷やさずに冷やす」 文／石川英輔
35 エコモノ

エコジンとは、“エコロジー＋人”、“エコロジー＋マガジン”のこと。環境のことを考える人が一人でも多くなることを目指す、環境省発信のエコ・マガジンです。
※本誌の掲載文のうち、執筆者の意見にあたる部分については、環境省の見解と異なることがあります。

中嶋朋子（なかじま ともこ）
東京都生まれ。国民的テレビドラマと呼ばれた「北の国から」で22年の長きにわたり蛍役を務める。以後、映画、舞台へも活躍の場を広げ、実力派として高い評価を得る。他に、朗読、執筆でも独特の感性を発揮、根強いファンを持つ。現在、東京FM「ふんわりの時間」（毎週日曜朝9時）でパーソナリティを務めるほか、フジテレビ系「牛に願いを～Love&Farm～」（毎週火曜夜10時）にレギュラー出演している。

上／撮影協力　キル フェ ボン代官山

ライフスタイルの延長が エコにつながれば、それでいい

〝気負わず、楽しく、身の丈で〟

そんな肩の力を抜いたエコライフを送っている中嶋さん。

「マイバッグと水筒はいつも持ち歩くようにしているんですよ」と、小さく折り畳んだ麻のバッグと、アルミ製の赤い水筒をカバンの中から取り出して見せてくれた。ちなみにこの日の水筒の中身は、自宅でろ過したお水だという。

「私は〝自然を守ろう〟とか、環境活動をしているという意識は全然なくて、好きなものを好きなこととして採り入れているだけ。シャカシャカのビニール袋よりもちょっと自分らしいものを持ちたいからマイバッグを持つ、とか。ライフスタイルの延長線上のことですよね。頑張りすぎると息が切れちゃうから」

中嶋さんがエコに目覚めたのは、8歳の頃から出演していたドラマ「北の国から」での経験が大きい。20年もの間、たびたび撮影で北海道を訪れるうちに培われたものだ。

「都会では人間の都合どおりになってしまう生活がわりと多いし、テレビ業界だったので、昼間でも暗幕を張って夜にしてしまうくらい自然に逆らうのが常だったんです。でも、あまりにも大きな自然に向き合うと、自分たちの小細工では到底打ち勝てない。〝人間ってちっちゃいんだ〟って思った。そういう自然観みたいなものは、小さい頃から当たり前のようにありました」

自然に対して謙虚になる。中嶋さんはそう表現する。ただ、一時期はその思いが高じて、環境問題に過敏になっていたことも。

「10年以上前でしたかね。環境問題に関心はあるのに、情報がまだほとんどない時代で。ごみの分別の仕方も自治体によって違うし、いろんな矛盾に突き当たってカリカリしていたんです。でも、そんな私を見た人に『分別なんて煩わしい』って思われたら最悪じゃないですか。だから例えば、無理に細かく分別するより、分かる範囲で分別する。そのとき、なるべく洗うなり拭くなりして出せば、回収業者の人が最終的に分別するときに、臭いとか気にせずやってもらえるかもなって。そんな風に価値観を変えていったんです」

現在は、9歳になる息子さんと、お互いの意見を出し合いながらのエコ生活。

「ごみの分別などは、子供と一緒に考えたりします。燃えるか燃えないか、それともリサイクルなのかと悩んでいるとき、息子が『このマークはリサイクルじゃない？』って見つけてくれたり。あとは食べ物があまりごみにならないようにする工夫。大根の皮とか何でも漬け物にしちゃうんですけど、今の時期だったらスイカの皮も美味しいんです。皮の近くまで綺麗に食べると、それが漬け物にできるから『頑張って食べて』って言う。そうすると次に漬け物になって出てきたときに、子供も『これか』って思えるでしょ」

環境にやさしいことは、身近なことからできるはず。中嶋さんの生活には、私たちにもできるエコのヒントがいっぱいある。

夏至の日の夜、全国でいっせいに電気を消す「100万人のキャンドルナイト」。6月24日、東京の芝公園で行われたイベントで、中嶋さんは台湾の絵本作家Jimmyの『君といたとき、いないとき』を朗読した。

写真提供／大地を守る会